

# 株式 上場

外食業界で初の株式上場を果たしたのは、七八年八月のことだ。産業化のステップに上場を検討し始めたのは、七二、七三年ごろにダイエーやイトーヨー

じ。「食へ物屋が上場なんてとても」というものだった。主取引行である日本興業銀行関係者の反応もやはり鈍い。

一人で思いで悩んでいたところ、長年の友人である三井孝昭氏（現三井ハイテック会長）が懇意にしていた証券会社員を紹介してくれた。勸業角丸証券の引受部調査役だった百瀬洋氏だ。当時まだ三十代半ばの百瀬氏は、英国で一年間の研修後に

が自分のものでなくなってしまう」という不安が募ってきた。会社の役員クラスでも消極論があり、会議はなかなか結論が出ない。堂々巡りが続いた。

そのとき、若手幹部の北口誠企画室長が「あなたはいつも飲食業を産業化すると言って、私たちを教育してくれた。上場と産業化の相関関係をどう考えたらいいか」と私に質問した。その一言で、胸のつかえがとれ

た。だが、家内だけは「上場するとあなたがまた働きすぎて、命をなくすことになる」と最後まで反対した。

## 外食初、決断まで5年

### 高値に幹部の売却相次ぐ

一カ月ほど滞在したニューヨークで米国の外食産業の発展ぶりを目の当たりにしてきた。そして「日本でも米国と同じように外食の時代が来る」と確信したといふ。

彼が中心になりロイヤルの上場計画を立て、上場準備室には同証券から武石幸男氏（現ドトールコーヒーマスター）が応援に来てくれた。計画が次第に現実化するにつれ、「上場すると会社

とおりにはならないし、設計など好きな仕事ばかりはできませんよ」とおっしゃり、盛田氏は「社員に株を分けていたが、優秀な技術者が小鳥店を開業するため上場後に株を売ってやめてしまった」と経験を話された。「うちの社員に限って、自分

株は絶対に他人に譲渡しない」と巻紙に書いて、署名し、母印を押した。



上場を支持してくれた勸業角丸証券の百瀬氏（左から2人目）らと（左端が筆者）

目によろやく三千二百二十円という高値が付いた。額面五十円の株価が一挙に六十倍以上になった。売れば億万長者となると、人間はどうしても弱い。創業時から産業化の目標に向かって苦業を共にした役員がいち早く株を売り、退職したのはさすがにショックだった。ほかに何人かの幹部がそれに続き、せっかくの連判状は有名無実になってしまった。

の株を売り払うようなことはいない」と思っても心配は残る。そこで福岡証券取引所への上場申請を終えた七八年四月に、持ち株が多かった役員や幹部社員二十三人を集めて連判状をつくらせた。株式安定のために、（数年後に）東証に上場するまでは、（ロイヤル創業者取締役）

# 私の履歴書

一 匡 頭 江  
いち きょう けい けい  
え がしら

①

力堂が上場したとき。「日本の先を行く米国のように、スーパーの次は外食の番」と考えたからだ。だが、最終的な決断を下すまで、五年近く逡巡が続いた。ひそかに上場の気持ちを抱き、野村、大和、日興など大手証券会社を回ると、応対してくれた支店長クラスの答えは同